



第1回

日本地域医療学会 学術集会

抄録集

ひとと地域を まるごと診る

～地域総合診療専門医の未来～



会期

令和4年12月2日(金)・3日(土)

会場

富士ソフト アキバプラザ

第1回

日本地域医療学会 学術集会

メインテーマ

ひとと地域をまるごと診る ～地域総合診療専門医の未来～

目 的

高齢化が進む日本では複数疾患を併存し、医療ニーズだけではなく介護・福祉ニーズも併せ持つ患者が増え、地域全体で治し・支え・寄り添う医療への転換が進んでいます。このような医療を実現するための担い手として、地域で幅広い疾患と多様な課題を抱える患者を継続的・包括的に診療できる総合診療医が求められています。地域では病気を診るだけでなく患者さんの人生に寄り添い、地域包括ケアを実践できる医師が必要です。今、時代は人と地域をまるごと診ることができる「地域総合診療専門医」を求めています。今回の学術集会では、地域総合診療専門医のありたい姿を探るとともに、これからの展望について議論を深めたい。

会 期

令和4年12月2日（金）・3日（土）

会 場

富士ソフト アキバプラザ

東京都千代田区神田練堀町3 富士ソフト秋葉原ビル 5F

TEL 03-5209-5261

主 催

一般社団法人日本地域医療学会

第1回 日本地域医療学会 学術集会

ごあいさつ

一般社団法人日本地域医療学会

理事長 小 野

剛

日 程 表

1 日目	6
2 日目	7
「交流会の開催」.....	8

会 場 案 内

.....	9
-------	---

学会参加について

.....	10
-------	----

全体プログラム（1日目）

開会式	12
特別講演	14
理事長講演・制度解説	18
指定演題（口演発表）	22

全体プログラム（2日目）

シンポジウム	36
講演	44
ランチョンセミナー	47
講演	50
パネルディスカッション	54
閉会式	65

御協賛名簿

第1回日本地域医療学会 学術集会御協賛名簿	68
-----------------------	----

第1回日本地域医療学会 学術集会の 開催にあたって

一般社団法人日本地域医療学会 理事長

小 野 剛

(秋田県：市立大森病院長)



高齢化が進む日本では患者が抱える複合的な疾病を総合的に診て、地域全体で治し・支え・寄り添う医療が求められています。このような地域医療実現の担い手として、「地域包括ケア」を実践できる総合診療専門医の活躍が大いに期待されるところです。地域では、幅広い領域の疾病と多様な課題を抱える患者を継続して診療することができ、「病気を診る」だけでなく「地域を診る」眼を習得できる絶好のフィールドです。患者さんの人生に寄り添い、地域ニーズにマッチし、「ひとと地域をまるごと診る」ことができる地域総合診療専門医の役割は今後大きくなるものと考えます。

この度12月2日（金）・3日（土）に「ひとと地域をまるごと診る～地域総合診療専門医の未来～」をテーマに、第1回日本地域医療学会学術集会を開催致します。本学術集会では、特別講演のほかに学識者の方々のマクロ的視点でのシンポジウム、多様な地域医療現場で活躍し経験豊富な医師のリアルな口演、さらには学生や若手医師による未来志向のパネルディスカッション等々、広範囲にわたる興味深くかつ魅力的・実践的なプログラムが予定されています。地域医療と地域総合診療専門医の未来を考える上で有意義な学術集会になるものと確信しております。多くの皆様にご参加いただき議論を深めることができれば幸いです。

最後に、本学術集会の開催趣旨に賛同し、ご支援いただきました皆さまに心から感謝を申し上げ開催のご挨拶とさせていただきます。

本学術集会は新型コロナウイルス感染症拡大を考慮し、ハイブリッド型での開催とし、十分な感染対策を行いながら実施させていただきます。

日 程 表
会 場 案 内
学会参加について

第1回日本地域医療学会 学術集会プログラム日程表

1日目 12月2日（金）

13:00～13:10 (10min)	○開会式 学会長挨拶 小野 剛 氏（一般社団法人日本地域医療学会理事長）
13:10～13:15	*舞台転換（5min）
13:15～14:25 (70min)	○特別講演 座 長：矢野 諭 氏（一般社団法人日本地域医療学会副理事長） 講 師：山本 英紀 氏（厚生労働省医政局医事課長） 演 題：「未定」
14:25～14:35	*休憩（10min） ※会場内換気
14:35～15:15 (40min)	○理事長講演・制度解説 講 師：小野 剛 氏（一般社団法人日本地域医療学会理事長） 講 師：大原 昌樹 氏（一般社団法人日本地域医療学会理事） 演 題：「日本地域医療学会設立及び地域総合診療専門医制度構築について（仮題）」
15:15～15:25	*休憩（10min） ※会場内換気
15:25～17:45 (140min) ※各団体 15 分	○指定演題（口演発表） テーマ「地域総合診療専門医の活躍の場」 座 長：邊見 公雄 氏（一般社団法人全国公私病院連盟会長） 発表者 江角 悠太 氏（公益社団法人全国自治体病院協議会） 中村 伸一 氏（公益社団法人全国国民健康保険診療施設協議会） 田中 志子 氏（一般社団法人地域包括ケア病棟協会） 西尾 俊治 氏（一般社団法人日本慢性期医療協会） 北村 立 氏（一般社団法人日本公的病院精神科協会） 藤森 勝也 氏（全国厚生農業協同組合連合会）

2日目 12月3日(土)

9:00～11:00 (120min)	○シンポジウム テーマ「鳥の目でみる地域医療」 座 長：仲井 培雄 氏（一般社団法人日本地域医療学会副理事長） シンポジスト： 川上 浩司 氏 京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 臨床情報疫学（MCR）ディレクター、 健康解析学講座（薬剤疫学分野）教授 デジタルヘルス学産学共同講座 研究責任者 （兼）学際融合教育研究推進センター 政策のための科学ユニット長 高橋 泰 氏 国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部 医療マネジメント学科 教授 国際医療福祉大学大学院 医療福祉経営専攻主任、医療経営管理分野・医療福祉経営学分野責任者 金子 惇 氏 横浜市立大学大学院データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス専攻講師
11:00～11:05	*休憩 (5min)
11:05～12:15 (70min)	○講演 座 長：小熊 豊 氏（一般社団法人日本地域医療学会副理事長） 講 師：武久 洋三 氏 （日本慢性期医療協会名誉会長、日本地域医療学会理事、博愛記念病院理事長） 演 題：「地域多機能病院における総合診療医の役割」
12:15～13:00	ランチョンセミナー 12:30～12:45 (15min)
13:00～14:10 (70min)	○「明日から使える外来超音波診療 膝・肩編」 講 師：白石 吉彦 氏（一般社団法人日本地域医療学会理事） ★デモンストレーション協力 島根大学医学部 上西凜太郎氏
14:10～14:20	*休憩 (10min) ※会場内換気
14:20～16:30 (130min)	○パネルディスカッション テーマ「地域医療の魅力を発見し伝えていくために、わたしたちができること」 司 会：川合 菜加 氏（鹿児島大学医学部 3 回生） 橋本麻里奈 氏（神戸大学医学部 3 回生） 江角 悠太 氏（志摩市民病院院長 14 年目） ◇発表 発表者：林 俊太 氏（志摩市民病院医長 7 年目） (15min) 山本 恭資 氏（亀田総合病院医長 9 年目） (15min) 日下 伸明 氏（志摩市民病院副院長 9 年目） (15min) 酒井 郁弥 氏（琉球大学医学部 3 回生） (15min) アドバイザー： 松本 昌美 氏（南奈良総合医療センター院長） 竹田 寛 氏（三重県病院協会理事長） 四方 哲 氏（京都府山城北保健所長、京都府立医科大学大学院 医学研究科総合医療・地域医療学教授就任予定） 大浦 誠 氏（南砺市民病院内科副部長） ◇全体討論 (45min) ◇演者からの提言 (10min) ◇理事長提言 (5min) ◇司会講評 (5min)
16:30	○閉会式 副学会長 矢野 諭 氏（一般社団法人日本地域医療学会副理事長）

交流会



一般社団法人日本地域医療学会
Japanese Association of Community Healthcare

第1回 日本地域医療学会 学術集会《交流会》の開催

日 時：2022年12月3日（土） 16：40～18：40

会 場：富士ソフトアキバプラザ 5F「レセプションルーム」

会 費：7,000 円（学生無料）

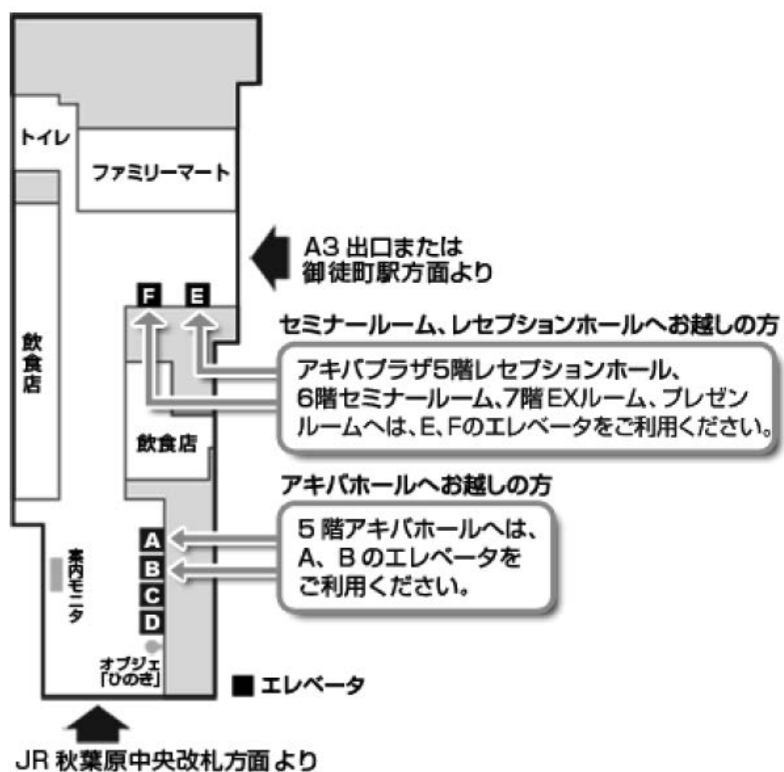
*新型コロナウイルス感染防止対策には十分配慮して開催いたします。

会場案内

富士ソフト アキバプラザ アキバホール



1階フロアマップ



■住所

〒101-0022

東京都千代田区神田練堀町 3

富士ソフト秋葉原ビル

TEL : 050-3000-2741

■秋葉原駅からの所要時間

- ・ JR 線 秋葉原駅
中央改札口より徒歩 2 分
- ・ つくばエクスプレス線 秋葉原駅
A3 改札口より徒歩 1 分
- ・ 東京メトロ日比谷線 秋葉原駅
2 番出口より徒歩 3 分

学会参加について

参加者の皆様へ

1 会場等の注意事項

- (1) 会期中はネームケースを常に着用をお願いします。
- (2) 会場内は禁煙となります。
- (3) 新型コロナウイルス感染拡大防止対策について
 - 会場入場時、検温および手指消毒 ※ 37.5 度以上の方は入場不可
 - 会場内マスク着用厳守／適宜換気を行う
 - スタッフはマスク着用および手指消毒、健康管理を徹底

2 受付について

受付日時 12月2日（金） 12：30～
 12月3日（土） 8：30～

プログラム (1日目)

開会式 13 : 00 ~ 13 : 10

開会のことば

第 1 回日本地域医療学会 学術集会

学会長 小 野 剛

特 別 講 演

特別講演

座長／矢野 諭 時間／13：15～14：25

講 師／山本 英紀（厚生労働省医政局医事課長）

講演要旨

共用試験の公的化、臨床研修の着実な実施、新専門医制度の創設などの医師養成過程に関する取組状

況や、医師の働き方改革、死因究明に関する動向について紹介させていただきます。

山本 英紀 (やまもと ひでのり)

経歴

平成 13 年 厚生労働省入省
労働基準局労働衛生課、健康局生活習慣病対策室、
がん対策推進室、医政局経済課、医事課、総務課等
に配属
平成 26 年 9 月 長野県衛生技監（平成 28 年 4 月～長野県健康福
祉部長）
平成 30 年 9 月 環境省大臣官房環境保健部環境リスク評価室長
令和 3 年 1 月 厚生労働省医政局医事課長

座長略歴

矢野 諭 (やの さとし)



現在 一般社団法人日本慢性期医療協会 副会長
同「診療機能評価基準委員会」委員長
同「看護師特定行為研修委員会」委員長
東京大学大学院医学系研究科 非常勤講師

経歴

昭和58年 3 月 北海道大学医学部卒業 第2外科入局
腫瘍外科学、呼吸器外科学の診療・研究に従事
平成 5 年 3 月 医学博士号取得
平成 8 年 4 月 NTT 東日本札幌病院 外科医長・救急部医長（兼任）
平成18年 4 月 南小樽病院副院長
平成21年 4 月 医療法人社団青優会 南小樽病院 病院長
平成25年10月 医療法人社団大和会 多摩川病院 理事長

理事長講演 制度解説

理事長講演・制度解説

時間／ 14 : 35 ～ 15 : 15

講 師／小野 剛（一般社団法人日本地域医療学会理事長）

講 師／大原 昌樹（一般社団法人日本地域医療学会理事）

日本地域医療学会設立及び 地域総合診療専門医制度構築について

2025 年が目前に迫る日本の多くの地域では、高齢化と人口減少が進んでいる。このような地域では複数の慢性疾患を持ち、医療ニーズだけではなく介護ニーズも併せ持つ高齢患者が多くなっている。このような状況の中で地域医療の現場では「治し・支え・寄り添う医療」への転換が求められ、多職種連携による地域包括ケアシステムの構築が喫緊の課題となっている。これからの地域医療に求められる医師は、地域包括ケアを実践でき、「ひとと地域をま

るごと診る」視点を持った地域総合診療専門医ではないかと考える。

日本地域医療学会は地域総合診療専門医の育成をめざして設立され、制度設計もほぼ構築され、来年度の専攻医募集に向けて準備を進めているところである。本講演では、地域総合診療専門医制度の概要や資格要件等について説明するとともに、今後の方向性についても言及したい。

小野 剛 (おの つよし)



経歴

昭和58年3月 自治医科大学医学部 卒業
 昭和58年6月 秋田大学医学部附属病院 第一内科
 昭和60年6月 町立羽後病院 内科科長
 平成3年6月 秋田大学医学部附属病院 第一内科
 平成5年5月 秋田大学医学部 助手
 平成7年10月 秋田大学医学部附属病院 講師
 平成8年4月 町立大森病院 院長
 平成10年4月 大森町保健医療福祉総合施設「健康の丘おおもり」
 管理者兼院長
 平成17年10月 市立大森病院 院長(市町村合併により名称変更)
 現在に至る

賞 罰

平成19年8月 全国自治体病院協議会 ヘき地医療貢献者表彰
 平成21年6月 山下太郎顕彰育英会 第18回山下太郎地域文化
 奨励賞
 平成23年2月 住友生命社会福祉事業団 第4回地域医療貢献奨励賞
 平成26年2月 読売新聞社 第42回医療功労賞
 平成28年10月 国民健康保険関係功績者厚生労働大臣表彰

学会及び社会貢献活動・その他

【社会貢献活動等】

全国国民健康保険診療施設協議会 会長
 一般社団法人 日本地域医療学会 理事長
 自治医科大学同窓会 会長
 自治医科大学顧問指導委員会 委員
 秋田県病院協会 副会長
 全国自治体病院協議会 理事
 全国自治体病院協議会 中小病院委員会 委員
 秋田県医療審議会 委員
 秋田大学医学部 臨床教授
 東京医科歯科大学医学部 臨床教授

【資格】

日本内科学会認定医
 日本消化器病学会専門医
 日本肝臓学会専門医
 日本人間ドック学会専門医・指導医
 日本プライマリケア学会認定医・指導医
 日本医師会認定産業医・認知症サポート医

大原 昌樹 (おおはら まさき)



経歴

昭和60年(1985年)3月 自治医科大学医学部卒業
 昭和60年(1985年)6月 香川県立中央病院 研修医
 昭和62年(1987年) 三豊総合病院 医員・副院長・院長・
 管理医長
 平成17年(2005年)4月～現在
 綾川町国民健康保険陶病院 院長
 綾川町国保総合保健施設綾南(えがお) 所長

全国国民健康保険診療施設協議会副会長

香川県国保診療施設協議会会長

香川県介護支援専門員協議会会長

香川県医師会常任理事(介護保険・在宅療養・認知症・プライマ
 リケア担当)

香川大学・愛媛大学・神戸大学・自治医科大学医学部非常勤講師

指定演題 (口演発表)

指定演題(口演発表)

時間 / 15 : 25 ~ 17 : 45

テーマ	地域総合診療専門医の活躍の場
座 長	邊見 公雄 (一般社団法人全国公私病院連盟会長)
発表者	江角 悠太 (公益社団法人全国自治体病院協議会)
	中村 伸一 (公益社団法人全国国民健康保険診療施設協議会)
	田中 志子 (一般社団法人地域包括ケア病棟協会)
	西尾 俊治 (一般社団法人日本慢性期医療協会)
	北村 立 (一般社団法人日本公的病院精神科協会)
	藤森 勝也 (全国厚生農業協同組合連合会)

発表要旨

へき地医療において、今最も不足している人材は、へき地医療を立て直す志しと総合診療能力を持った医師であると考える。

そしてその立て直しには、病院マネジメント能力、地域マネジメント能力が必須であり、それがこの地域総合診療専門医制度によって、育てられた医師たちが、全国のへき地医療を支える病院のリー

ダーとなる存在となることが展望される。

その中で当院で2022年4月より始まった院長養成コースについてお話しする。

へき地大好きな医師を育て集め、看護師を育て集め、医療介護従事者を育て集め、へき地医療に特化した能力を持って今後の日本を明るくする、まずは院長から。

地域総合診療専門医の活躍の場 ～へき地医療の現場で働く～

地域総合診療専門医の活躍の場の一つとして、へき地・離島の診療所が考えられる。ソロプラクティスになることが多い。自身の30年の経験をもとにへき地での総合診療を紹介する。なお、私は自身のことを“外科医になりそこねた公務員のへき地総合医”と認識している。

へき地での地域医療では、好む好まざるにかかわらず、必要に迫られて総合診療をやらざるを得ない。大規模急性期病院や大学病院の総合診療部門のように、その立ち位置やアイデンティティー云々を考える必要は全くないといえる。へき地総合医は、各臓器別専門医へのゲートオープナーであると同時に、彼らが専門性に特化できるようにゲートキーパーとしての役割もある。地理的關係上、都市部の総合医と比べ、可能な限りワンストップで終わらせる必要がある。

介護保険において、ケアマネジャーは利用者のケアプランを作成するが、直接の介護サービスは提供しない。当然ながら総合医は多様な医療サービスを提供するので、利用者側から見るとケアマネジャーよりも使い勝手がよいはずである。ところが実際のところ、大多数の介護保険の利用者がケアマネジャーにプランを任せるのに比べ、医療においては多くの高齢患者が自分の判断で各専門医を受診する傾向にある。残念ながら、総合医のゲートオープナー機能が十分に果たせていないことも少なくない。

在宅医療は、病床が少ないあるいは病床がないようなへき地では必須となる。生活の場である自宅での診療では、患者の人生観に寄り添う態度が求められる。在宅でも積極的な癌治療を希望した患者と治療を避けて癌と共存した患者の対照的な2例を紹介する。

旧名田庄村時代に診療所長と保健福祉課長を兼任した経験がある。人口の少ないへき地では、保健・医療・福祉に関わるスタッフが少ない分、密接に連携できる。介護など福祉分野とともに、健診、がん検診、健康づくりなど保健分野でも協働して取り組む機会が多い。旧名田庄村では、昭和63年から胃

がん検診を内視鏡でも行い、胃癌の早期発見に取り組んで成果を上げてきた。また、旧名田庄村は福井県内で介護保険料が最も安く、一人当たりの老人医療費が最も低いレベルを維持していた。総合診療を提供しつつ、予防と在宅医療に力を入れてきたことが要因の一つと考えられる。

一般的にへき地にはモンスター患者が少なく、訴訟リスクもほとんどないため、基本的に患者-医師関係は良好である。都市部と異なり匿名性がないため、個人の逸脱した行動が抑制されるのであろう。多少の不自由さや窮屈さはあっても、緩やかな監視が地域社会を平穏に保っているため、安心して医療に取り組める環境にある。

このような環境だからこそ、年間10名以上、臨床研修医の受け入れができていた。当診療所の地域医療研修でもっとも学んだことは何かという問いに対し「“患者さんを診る心”が養われた」と答えた研修医がいた。似たような回答の研修医が多い。おそらく彼らの視点が、医療を提供する自分から医療を提供される患者へと移ったのだと思われる。また、研修医からの評価が意外と高いのが、雑談のように質問しながら患者の生活背景を探る私の“質問力”である。自分では全く気づかなかったことを研修医が指摘してくれるのは興味深い。へき地という環境が、患者を診る心と質問力を養ってくれるのかもしれない。

へき地では紹介先の後方病院も医師不足であることが少なくない。へき地総合医として、後方病院の各科の医師の充足度に応じて、自らの診療スタイルを変容させてきた。また、この30年間、診療所長の肩書きは変わらないが、自分がやりたいことと地域から求められていることのバランスをとりながら、仕事の内容を変容させてきた。“変容力”と“バランス力”が、へき地総合医として必要な資質と考える。この2つの資質があれば、他の領域の専門研修終了者やセカンドキャリアの医師もへき地医療で活躍することは十分可能ではないだろうか。

地域総合診療専門医の地域包括ケア病棟活躍の場 ～地域包括ケア病棟協会の立場から～

高齢者の多くは、複数疾患を有するためポリファーマシーになりやすく、日常生活動作や栄養状態、認知機能が低下し、入院前から生活支援を要とします。そのため高齢者に対するリハビリテーションは、社会復帰を目指す疾病モデルではなく、生活復帰を目指す廃用症候群・認知症モデルの考え方が必須です。地域包括ケア病棟協会ではこういった多病の高齢者を“multimorbidity 患者”と呼んでいます。

“multimorbidity 患者”に多い疾患は呼吸器疾患である COPD、気管支喘息をはじめ、高血圧、虚血性心疾患、不整脈、うっ血性心不全と言った循環器疾患、認知症やうつ病、フレイルなど様々な疾患や状態が重複します。これらにより死亡率が上昇し、QOL が低下するなどから健康アウトカムへの負の影響があると言われています。さらに受診回数や受診科が増加し、合わせて医療費も自己負担、社会保障共に上昇しやすくなります。病状悪化により入院することになれば日常生活のケア（介護サービス）からの分断され退院後に同じ身体機能で元の生活に

戻ることが難しくなります。

結果としてある程度の重症度を持った患者の診療が病院中心にならざるを得ないのですが、いわゆる急性期病棟では「疾病治療」が中心であり、退院後の生活のしやすさを視野に治療やリハビリテーションが提供できるかという点必ずしもその機能を有している病院が地域にあるとは限りません。むしろこれらを解決できる「総合診療」や「老年医学」のマインドを持った医師が必要不可欠です。特定行為研修修了看護師を含む多職種協働が重要です。さらに他職種と共通言語を持ち、疾病ではなくその地域に合わせた生活を背景に見据えながら診療を行う専門医が、頼りになります。つまり“地域総合診療専門医”はまさに地域包括ケア病棟のための専門医と言っても過言ではないでしょう。“multimorbidity 患者”の地域診療拠点の地域包括ケア病棟こそ“地域総合診療専門医”こそ働いてほしいと切に願います。

合わせて当日は、地域ケア病棟協会の得意とする補完代替リハビリテーションなどについて現場の事例などを少しご紹介します。

これからは総合診療医の時代： 今こそ「地域を診る総合診療医」が活躍するとき

慢性期医療はますます医療度が高くなり、地域（都会～過疎地域）における役割の重要性が増してきている。また医療・介護制度の変遷により、慢性期医療を担う施設にはさまざまな機能を持つ病棟（病床）が増えてきている。これを日本慢性期医療協会では「地域多機能病院」と称している。それぞれの病棟は患者の状態に応じて適切かつ円滑に入院を受け入れ、退院支援することが重要である。それを実践するためには医療・介護制度や診療報酬を熟知し、チーム医療がおこなえる総合診療医が必要である。

演題発表では事例を用いて具体的な入退院支援の流れを提示し、総合診療医が慢性期施設でどのように活躍できるかを説明したい。

慢性期で働く多くの医師（臓器別専門医が多い）はすでに「総合診療医のごとく」働いていると思われる。しかし、不安を抱きながら働いている医師も多いのが現実である。やはり、自分が働いている施設で自信をもって働ける「総合診療医プログラム」が必要と考える。

日本慢性期医療協会は総合診療医認定講座を年に1回開催し、今年で8回目を迎える。昨年までに

412名の医師（会員301名 非会員111名）が受講している。大学病院、急性期病院に勤務している医師の受講も多い。多くの医師が総合診療医として働きたいと考えているものと推測される。講座内容は高齢者特有の病態の解説と治療、リハビリテーション、嚥下障害、排泄ケア、医療・介護制度など24時間の講義と9時間の症例検討があり計6日間のコース（3か月）となっている。さらにこの総合診療医認定講座をブラッシュアップするために当協会では他施設での見学・研修、スキルアップトレーニングなどを考えている。地域総合診療専門医あるいはセカンドキャリア専門医をめざす医師だけでなくすべての医師に受講していただきたい。

地域包括ケアができる実践研修、各種講座・研修会の受講、医療的スキルアップのトレーニング、他施設での研修、地域との交流、そして研修レポートの作成、試験などの経過を経て、「地域総合診療専門医」として社会的に認められ、自信をもって働けるプログラムを学会として整備されることを期待する。

慢性期医療こそ「地域総合診療専門医」が活躍できる場である。

総合診療専門医の活躍の場としての精神科病院

演者は自治医科大学を卒業し石川県立中央病院で1年余の初期研修の後、市立輪島病院舩倉診療所、公立穴水総合病院兜診療所で計3年半の僻地診療所勤務を経験した。その後後期研修として精神科を選択し、単科精神科病院である石川県立高松病院（現石川県立こころの病院、以下当院）に赴任した。能登北部で僻地診療を経験してきた演者にすれば、精神科病院こそ「医療の谷間」であった。世間から注目されないこともあって、医師もスタッフも患者も皆それが当たり前だと感じていることに衝撃を受けた。先輩諸氏の悪口になるので具体例はあげないが、身体疾患の診断や管理に関しては、自分が一人でやってきた診療所と同等、場合によってはそれ以下の能力しかなかった。紆余曲折を経て認知症医療を担当することになり、身体管理も含め精神科病院における認知症医療を考え直し、10年ほど前には認知症を短期間で自宅へ退院させる先駆的な精神科病院としてマスコミでも繰り返し紹介されるようになった。認知症者の精神科入院を最後の砦としてではなく、地域生活を続けるための一つのオプションと捉え、地域の多職種を巻き込んだ早期診断、早期対応の仕組みは「高松方式」として県のモデルにもなった。自分の考える認知症医療には、若い頃の地域での経験が生かされており、今でも認知症という疾患を通じ地域医療を実践しているという実感がある。

さて当院は400床の単科精神科病院であり、石川県精神科救急システムの基幹病院である。一方で民間病院では対応困難な重度かつ慢性期にある精神障

害者も多く入院しており、1年以上入院を継続している患者が235人もいる。当院を一つの島に例えるなら、令和4年10月末現在、人口321人、平均年齢約67歳であり、糖尿病が81人（25%）、高血圧症が150人（47%）、慢性心不全が49人（15%）、習慣性便秘が290人（90%）など、恐ろしく不健康な島である。全国自治体病院協議会に属する単科精神科病院40施設のうち、内科常勤医がいるのは8施設しかなく、当院も含め残り80%の施設には身体を診る医師がいない。諸外国のデータで統合失調者は一般人よりも10～15年平均寿命が短いことが知られており、心血管系イベントでの死亡が多いことは周知の事実である。わが国でも同様であるが、われわれ精神科医も、また行政もそこには注目してこなかった。最近は精神医療も様変わりし、「医療者の考え」ではなく「当事者の考え」が尊重され、パーソナル・リカバリーが治療目標となっている。すなわち障害があっても地域で充実した、生産的な生活を送れることが、その人にとって重要なのだが、それには身体の健康が必須であろう。

総合診療専門医が精神科病院に勤務すれば、患者や精神科医にとってのメリットは計り知れない。一方で総合診療専門医にとっても、認知症やうつ病、発達障害などに対する精神的な見立てや接し方を学ぶことができる。精神科病院と総合診療専門医はWin Winの関係にあり、両者を隔てるものは何もないと思うが、いかがであろうか。

地域総合診療専門医の活躍の場 地域包括医療・ケアを展開する病院

あがの市民病院は、新潟県阿賀野市にあり、県庁所在地の新潟市から、東に約20kmのところにあります。新潟県は、医師不足県で、厚生労働省の示した「医師偏在指標を入れた医師充足度」は、47位でした。新潟県には20の市がありますが、阿賀野市の医師数は、20市中19位です。人口10万あたりの医師数が約79人（全国平均は約259人）で、相当の医師不足の市です。

阿賀野市の人口は約4万人、高齢化率約34%、高齢者単身世帯・高齢者世帯が全体の世帯数の約25%で増加しています。阿賀野市には、2つの病院がありますが、1つは脳神経の専門病院であり、総合病院は当院しかありません。

当院は、昭和29年に水原町国保直営病院として発足し、平成22年に新潟県厚生連が指定管理者になり、平成27年に新病院の「あがの市民病院」として開院しました。16の診療科があり、総病床数196床、一般急性期病床92床、地域包括ケア病床104床で、介護医療院54床を病院内に併設しています。すなわち、急性期から、回復期、慢性期まで幅広く対応するケアミックス型病院です。

病院には、糖尿病・生活習慣病・予防治療センター、消化器病センター、骨関節疾患センター、地域医療・連携センターの4つのセンターを有し、かつ、透析、呼吸器診療にも力を入れています。糖尿病・生活習慣病・予防治療センター、消化器病センター、骨関節疾患センターでは、常勤医とともに、地元新潟大学からの非常勤医師と協力して、市民における生活

習慣病、消化器病、骨関節疾患の発症・進行に関する実態と要因を明らかにし、市民の健康寿命を延ばすための施策立案を、科学的かつ効果的に進めるための研究も行っています。

病院では、健康寿命日本一を目指す市と協力して、地域包括医療・ケアを充実させる取り組みとして、「自助」に力を入れています。すなわち、ヘルスプロモーション活動として、年8回の糖尿病教室、年数回の地域講演会・出前健康講座、中学校での「たばこの害」・「こわ〜い薬物依存」の講演、地域医療フォーラムや病院祭での講演、年10回の新潟大学医学部健康講座塾など、様々な健康情報提供の場を作っています。さらに地域活動として、七夕コンサート、クリスマスコンサート、民謡流し参加などを通して、地域の方々との「ふれあい」「交流」を図っています。また、市内介護施設と、「あがの介護・病院連携の会」を設立し、隔月で定期開催しています。この連携の会では、「患者情報連絡票」を作成し、外来受診をよりスムーズにし、顔の見える関係性作りを行っています。

当院は、予防医療から急性期・回復期・在宅医療を含めた慢性期、介護分野までの包括的医療を提供する地域の中心的病院として、また住民に信頼され愛される病院であり続けたいと願い、職員一同ワンチームで活動しています。

これらの取り組みにより、臨床研修医が増加し、経営状況は改善し、当期利益金では3期連続の黒字化ができています。

江角 悠太 (えすみ ゆうた)



経歴

東京出身
2000 年、東京都立西高等学校卒業
2009 年、三重大学医学部卒業
2009 年、沖縄中部徳洲会病院 初期研修医
2011 年、三重大学家庭医療総合診療科
亀山医療センター 名張市立病院 県立一志病院
2014 年、ピースボート船医
2014 年 12 月 志摩市民病院内科
2016 年、同病院長 総合診療科

2018 年、全国自治体病院協議会三重支部長
2019 年、地域包括ケア病棟協会理事
2020 年、地方創生医師団 (TAO 医師団) 団長
2021 年、全国自治体病院協議会中小病院委員
2022 年、日本地域医療学会理事、三重県病院協会理事
全国自治体病院協議会地域包括医療・ケア認定審査委員

教育関連、所属資格)

NPO 法人 Touch the future	理事
一社未来の大人応援プロジェクト	理事
三重大学医学部	臨床講師
ユマニテク看護助産専門学校	非常勤講師
名古屋医専	非常勤講師
鈴鹿医療科学大学	非常勤講師
皇學館大学	非常勤講師
東京医科歯科大学医学部	非常勤講師
日本専門医機構	総合診療特任指導医
日本プライマリケア連合学会	家庭医療専門医 指導医

中村 伸一 (なかむら しんいち)



経歴

1989 年 自治医科大学卒業
1989 年 福井県立病院診療部 研修医
1991 年 名田庄村国民健康保険名田庄診療所 所長
1996 年 福井県立病院外科 医長
1999 年 あっとほ〜むいきいき館 ジェネラルマネージャー
2000 年 福井県国保診療施設研究協議会 会長
全国国保診療施設協議会 理事
自治医科大学地域医療学 臨床講師
2006 年 おおい町国民健康保険名田庄診療所 所長

2009 年 自治医科大学地域医療学 臨床教授
2016 年 全国国保診療施設協議会 診療所委員会 委員長
2017 年 NPO 法人 J-HOPE 理事長
2022 年 全国国保診療施設協議会 副会長

著書

『自宅で大往生－「ええ人生やった」と言うために－』（中公新書ラクレ）
『寄りそ医－支えあう住民と医師の物語－』（KADOKAWA）
『サヨナラの準備』（メディアファクトリー）
『入門！自宅で大往生－あなたもなれる「家逝き」達人・看取り名人』（中公新書ラクレ）

田中 志子 (たなか ゆきこ)



経歴

1991 年 帝京大学卒業
2004 年 介護老人保健施設大誠苑 施設長
2007 年 社会福祉法人久仁会 理事長
2009 年 群馬大学大学院修了
2010 年 医療法人大誠会 副理事長
2011 年 同 理事長

主な資格

日本内科学会総合内科専門医、
日本老年医学会老年科専門医・指導医
日本認知症学会認知症専門医・指導医
認知症サポート医

主な所属

沼田利根医師会理事、日本慢性期医療協会常任理事、地域包括ケア病棟協会理事、日本リハビリテーション病院・施設協会常務理事、全国老人保健施設協会副会長、日本認知症学会代議員、日本老年医学会代議員・認知症対策小委員・広報委員・ダイバーシティ推進委員、群馬県慢性期医療協会支部長、日本認知症グループホーム協会群馬県支部理事

著 書

「ふるさとの笑顔が、咲き始める場所
～地域包括ケアシステムを実践する、とある病院のチャレンジ～」
幻冬舎
「身体拘束ゼロの認知症医療・ケア」照林社
「楽になる認知症ケアのコツ」技術評論社
「高齢者栄養ケア UPDATE」医歯薬出版株式会社
「施設におけるエンドオブライフ・ケア」ミネルヴァ書房
「スーパー総合医 地域利用連携・多職種連携」中山書店
「介護福祉のための医学」弘文堂
「介護福祉士講座 こころとからだのしくみ」建帛社
「医療介護福祉士認定講座テキスト」厚生科学研究所 など多数

西尾 俊治 (にしお しゅんじ)



経歴

1979 年 3 月 愛媛大学医学部卒業
1983 年 3 月 愛媛大学医学部泌尿器科学教室 助手
1988 年 9 月～平成元年 8 月
イギリス国マンチェスター大学留学（尿路結石発生メカニズムの研究）
1989 年 4 月 愛媛大学医学部泌尿器科学教室 講師
1998 年 10 月 愛媛大学医学部泌尿器科学教室 助教授
2002 年 4 月 愛媛大学医学部附属病院低侵襲手術センター 副センター長併任

2004 年 2 月 南松山病院 院長
2006 年 4 月 済生会今治病院 副院長
2011 年 4 月 南高井病院 院長

現在にいたる。

1986 年 医学博士取得 日本泌尿器科学会会員
2014 年～ 愛媛県慢性期医療協会 会長
2016 年～ 日本慢性期医療協会 総合診療医認定講座委員会委員長
排尿自立指導料研修会 責任者
2018 年～ 日本慢性期医療協会 常任理事

北村 立 (きたむら たつる)



経歴

【所 属】 石川県立こころの病院

【学歴・職歴】

1962年2月 石川県金沢市生まれ
1987年3月 自治医科大学卒
1987年6月 石川県厚生部技術吏員（医員）
1987年6月 石川県立中央病院初期臨床研修医
1988年10月 市立輪島病院触診診療所
1989年4月 公立穴水総合病院兜診療所
1992年4月 石川県立高松病院
2004年4月 同院診療部長
2007年4月 同院副院長

2009年4月 石川県認知症疾患医療センター所長を兼任
2013年4月 石川県立高松病院院長
2021年11月 病院名変更に伴い、石川県立こころの病院院長

【資 格】

医学博士

精神保健指定医

専門医・指導医：日本精神神経学会、日本老年精神医学会、日本認知症学会

【団 体】

全国自治体病院協議会常務理事・精神科特別部会部会長

日本病院会理事、全国公私病院連盟理事、日本公的病院精神科協
会理事

日本老年精神医学会理事、日本地域医療学会理事

【教 育】

金沢大学医薬保健学域医学類臨床教授（学外）

金沢医科大学臨床教授（学外）

自治医科大学臨床教授（地域担当）

藤森 勝也 (ふじもり かつや)



経歴

学歴

昭和60年3月 自治医科大学卒業
昭和60年5月21日 医師免許取得
平成8年10月8日 医学博士（新潟大学）
学位論文

「Ventilatory response to continuous incremental changes in respiratory
resistance with mild asthma」(Chest)
「喘息患者と正常人における気道収縮時の換気変化について」

職歴

昭和60年5月 新潟大学医学部付属病院にて研修（～昭和61年3月）
昭和61年4月 新潟県立中央病院にて研修（～昭和63年3月）
昭和63年4月 新潟県立妙高病院 内科医師（～平成3年3月）
平成3年4月 新潟大学医学部第二内科で後期研修（～平成4年3月）
平成4年4月 新潟県立柿崎病院 内科医長（～平成6年3月）
平成6年4月 新潟県立がんセンター新潟病院 内科医長（～平成7年3月）
平成7年4月 新潟県立吉田病院 内科医長（～平成8年3月）

平成8年4月 新潟県立新発田病院 内科部長（～平成15年3月）
平成15年4月 新潟県立加茂病院 副院長（～平成19年3月）
平成19年4月 新潟県立柿崎病院 院長（～平成29年3月）
平成29年4月 あがの市民病院 院長（～現在）

その他の活動歴

新潟県国民健康保険診療施設協議会 会長（平成30年9月～現在）
全国国民健康保険診療施設協議会 理事（現在；常務理事）（令和2年6月～現在）
新潟大学医学部 非常勤講師（平成8年～平成24年）（平成26年～現在）
新潟大学医学部 臨床教授（令和3年1月1日～現在）
新潟大学医学部学士会北蒲原支部 理事（令和2年3月1日～現在）
自治医科大学医学部呼吸器内科 外部講師（平成23年～現在）
新潟県国民健康保険診療報酬審査委員会 審査委員
（平成17年～現在）（H27年10年継続表彰）
（平成29年4月～平成31年3月 常務処理審査委員）
新潟県アレルギー疾患医療連絡協議会委員（平成30年4月～現在）
新発田北蒲原医師会 理事（平成30年6月～現在）

新潟アレルギー研究会会長（平成22年～現在）
日本東洋医学会新潟県支部会長（令和2年1月～現在）
日本医薬品安全性学会理事（平成26年4月～現在）
日本アレルギー学会代議員（平成9年～平成17年、平成23年～現在）
日本東洋医学会代議員（平成26年10月～現在）
日本プライマリ・ケア連合学会代議員（平成27年11月～現在）
日本咳嗽学会 評議員（平成11年～現在）
啓発・広報委員長 財務委員会委員

賞罰

平成12年 新潟県医師会学術奨励賞 受賞
平成29年1月 自治医科大学 新潟県同窓会 地域医療貢献奨励賞 受賞
平成29年4月 自治医科大学医学部同窓会 医燈会 第1回地域医療奨励賞 受賞
平成29年6月 新潟県病院局 県立柿崎病院名誉院長
令和2年12月 第14回地域医療貢献奨励賞（住友生命福祉文化財団） 受賞

邊見 公雄 (へんみ きみお)



経歴

出生

昭和 19 年 2 月 26 日生

略歴

昭和 43 年 9 月 京都大学医学部卒業
 昭和 45 年 3 月 大和高田市立病院 外科医員
 昭和 47 年 4 月 京都大学医学部附属病院 第二外科医員
 昭和 53 年 2 月 赤穂市民病院 外科医長
 昭和 62 年 4 月 赤穂市民病院 病院長就任
 平成 21 年 4 月 赤穂市民病院 名誉院長就任

資格

昭和 44 年 1 月 医師免許
 昭和 54 年 3 月 京都大学医学博士

役職

特定非営利活動法人 地域医療・介護研究会 JAPAN 会長
 一般社団法人全国公私病院連盟会長
 公益社団法人全国自治体病院協議会名誉会長
 京都大学学際融合教育研究推進センター・超高齢社会デザイン価値創造ユニット特任教授
 一般社団法人日本専門医機構前理事

NPO 法人ベッツ・フォー・ライフ・ジャパン名誉理事長
 一般社団法人日本病院会参与 (元常任理事)
 元兵庫県参与 平成 21 年 4 月～令和 4 年 3 月 (13 年間)
 兵庫県医療審議会副会長
 徳島県交流大使
 関西広域救急医療連携計画推進委員会会長
 赤穂市観光大使
 京都大学医学部附属病院運営顧問会議委員
 公立大学法人奈良県立医科大学学外有識者委員会委員
 京都府公立大学法人経営審議会委員
 公立大学法人奈良県立医科大学学外有識者委員会委員
 公益社団法人日本人間ドック学会元理事 (元サーベヤー)
 公益財団法人日本医療機能評価機構理事 (元サーベヤー) (先日退任)
 同志社大学大学院アドバイザー・ボード (終了)
 有限責任中間法人京都大学外科交流センター相談役 (初代会長)
 特定非営利活動法人日本医療経営機構理事
 地域医療福祉情報連携協議会名誉会長
 一般社団法人健康・医療・教育情報評価推進機構 最高顧問
 日本 HPH ネットワーク 顧問
 2018.4 ひょうご人生 100 年時代プロジェクト推進委員
 日本から外科医がいなくなることを憂い行動する会 理事 (休会中)
 2007. 地域医療福祉情報連携協議会 名誉会長
 2019.6 特定非営利活動法人卒後臨床研修評価機構 理事

また、
 厚生労働省社会保障審議会医療部会委員並びに医療分科会委員
 (2005.9～2011.10 中央社会保険医療協議会委員)
 をはじめとする国・県・自治体等多数の要職を兼任してきた

プログラム (2日目)

シンポジウム

シンポジウム

時間／ 9 : 00 ～ 11 : 00

テーマ	鳥の目でみる地域医療	
座 長	仲井 培雄（一般社団法人日本地域医療学会副理事長）	
シンポジスト	川上 浩司	京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻 臨床情報疫学（MCR）ディレクター、健康解析学講座（薬剤疫学分野）教授 デジタルヘルス学産学共同講座 研究責任者 （兼）学際融合教育研究推進センター 政策のための科学ユニット長
	高橋 泰	国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部 医療マネジメント学科 教授 国際医療福祉大学大学院 医療福祉経営専攻主任、医療経営管理分野・医療福祉経営学分野責任者
	金子 惇	横浜市立大学大学院データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス専攻講師

「医療現場や地域の健康データを活用した医学研究の展望」

私たちは、診療報酬請求（レセプト）情報、DPC 情報、調剤情報、そして、電子カルテ由来の診療情報といった大規模な医療データベースを活用して、臨床疫学研究、薬剤疫学研究を実施している。データベースを用いた研究においては、とくに構造化されたデータを用いて因果推論による疫学研究を実施することで、急性期医療における適正な介入手法の選択、小児や妊婦に対する医薬品の安全性や有効性の評価、地域における黄砂や PM2.5 の飛来が疾患発症に与える影響、糖尿病患者の薬剤による治療実態の把握や予後の捕捉、免疫系疾患の早期治療開始が腎臓予後に与える影響の検討などを実施してきた。

また、全国自治体において学校保健安全法あるいは母子保健に基づいて実施されている健診情報に着目して、2015 年から学校健診（小中学校）、2020 年からは乳幼児健診の結果をデジタル化し、保護者やご本人に還元するという取組を開始している。また、

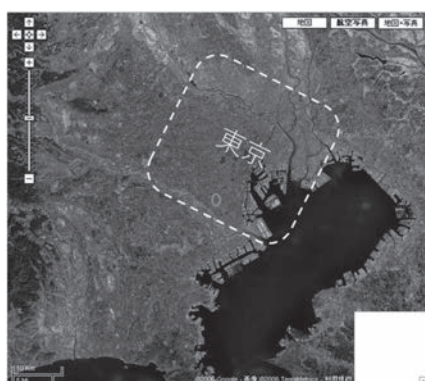
匿名化された集計情報を用いて、市町における健康福祉の政策立案の基礎資料としたり、全国レベルの集計情報については、予防医療のための学術研究にも活用されることを目指している。現在、学校健診に関しては全国約 160 の自治体と連携している。

健診結果をデジタル化して住民一人一人に提供するということは、保護者への産前産後の支援やお子さんの成長を確認できるという喜びのみならず、個人が電子生涯健康手帳（PHR）の一環として、将来にわたって健康の記録を保持できるという意味を持つ。PHR は、乳幼児、学童が成長していつの日か医療機関を受療する際に医師に情報共有することで、より効果的な医療を受けたり、重症化予防のためにも大いに役に立つと期待されている。

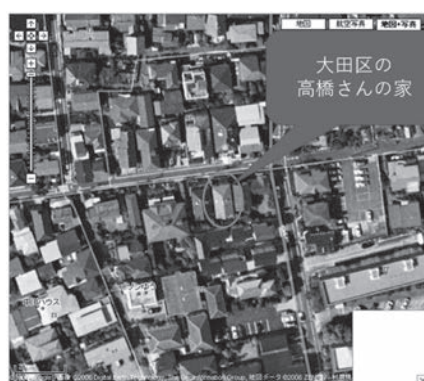
本講演では、以上のような基盤整備と研究の実例について紹介する。

「鳥の目でみる地域医療」

「鳥の目≡マクロの目」、「虫の目≡ミクロの目」と言われている。



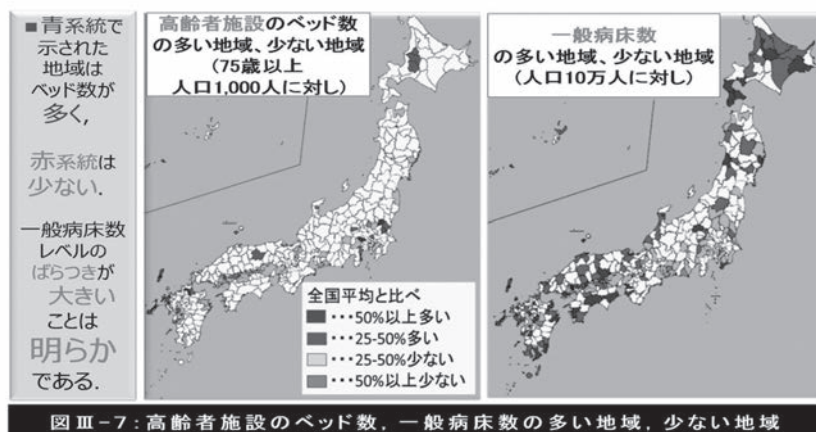
（鳥の目、マクロの視点）



（虫の目、ミクロの視点）

医療の基本は、一人一人の患者さんや一つ一つの医療行為が見えるミクロの視点である。一方、鳥の目（マクロ）視点を持つことにより、ミクロの視点からは得ることが難しい「広い視野」による大局的な発想と「時の流れ」を踏まえた継続可能性が高い発想が可能になる。

以下が、鳥の目による「広い視野」による発想の一例である。医療は西高東低という言葉に代表される地域格差が大きいですが、高齢者施設は地域格差がほとんどないことがわかる。



「時の流れ」を踏まえた発想は、これまでの推移や組織や制度のDNAを知ることができるようになるので、大切である。講演では、地域包括ケア病棟の歴史を振り返り、この病棟のDNAを考えてみたい。また制度や時代の変異を自分なりにどのように捉え、経営にどのように活用するかを論じてみたい。

鳥の目で見える地域医療 - 島医者 の視点・研究の視点 -

背景

諸外国ではへき地の程度を表す尺度を作成し、臨床研究や Health for all に向けた政策決定に用いている。しかし、日本では過疎地域・条件不利地域などの区分はあるが医療分野におけるへき地尺度は存在せず、医療資源の分配に関する議論に必要な指標は十分でない。

目的

我々は修正デルファイ法を用いて療分野におけるへき地尺度（Rurality Index for Japan: RIJ）を作成し妥当性の検証を行ったのでその概要と今後の活用について報告する。

対象、セッティング

スコーピングレビューを元に研究チーム・へき地の住民・医療者でディスカッションを行い RIJ に用いる項目の候補を抽出した。その候補を用い、全国のへき地住民や、へき地医療従事者・行政職員 100 名を対象に 3 回の質問紙調査を行った。

結果

1 回目の調査では回答率 85%（年齢中央値 42 歳、女性 43.5%）であった。3 回の調査から人口密度・二次救急病院までの距離・離島・天候による医療アクセスへの影響の 4 項目が抽出された。郵便番号区域を単位としてこれらを 1～100 点で点数化したモデルを作成し、研究チームとデルファイ法参加者での議論を元に RIJ を決定、地図を作製した。全国 11 万 3952 の郵便番号区域の平均 RIJ（標準偏差）は 50.5（28.9）であり、過疎地域・条件不利地域での平均 RIJ はそれぞれ 75.7（20.6）、66.9（24.9）であった。同様に市区町村・二次医療圏単位の RIJ も作成した。RIJ と医師偏在指数との相関係数は -0.45、平均寿命については男性 -0.35、女性 -0.13 であった。

結論

本研究で開発した RIJ は日本の医療分野におけるへき地尺度として、へき地医療に関する臨床研究、政策立案に有用と考えられる。本研究は現在論文化し投稿中である。論文化されたのちに研究目的であれば無償で利用可能とする予定である。

川上 浩司 (かわかみ こうじ)



経歴

1997年筑波大学医学専門学群卒（医師免許）、2001年横浜市立大学大学院医学研究科頭頸部外科学卒（医学博士）。米国連邦政府食品医薬品庁（FDA）生物製剤評価研究センター（CBER）にて細胞遺伝子治療部 臨床試験審査官、研究官を歴任し、米国内の臨床試験の審査業務および行政指導に従事。東京大学大学院医学系研究科客員助教授を経て、2006年に33歳で京都大学教授（大学院医学研究科社会健康医学系専攻・薬剤疫学）。2010年－2014年京都大学理事補（研究担当）、2011年より京都大学学際融合教育研究推進センター・政策のための科学ユニット長。慶應義塾大

学医学部 客員教授を兼務。原著論文は160報以上。

主な公的活動経験

厚生労働省 データヘルス・審査支払機関改革本部アドバイザー（2018年）

内閣官房 健康・医療戦略室 医療情報取扱制度調整WG 委員（2016年）

文部科学省 科学技術審議会 戦略的基礎研究部会 臨時委員（2015年）

内閣府 健康研究推進会議 アドバイザリー会議 委員（2009年）

経済産業省 産業構造審議会 研究開発小委員会 委員（2009年）

文部科学省 科学技術政策・イノベーション委員会 委員（2008年）

学術学会活動

健康・医療・教育情報評価推進機構（HCEI）常務理事、日本臨床疫学会理事、日本薬剤疫学会理事、日本臨床試験学会理事、医療データベース協会理事、日本セルフケア推進協議会理事、ヘルスケア・データサイエンス研究所理事、地域包括ケア病棟協会参与、国際医薬経済アウトカム学会日本部会評議員。

高橋 泰 (たかはし たい)



経歴

1986年金沢大学医学部卒、東大病院研修医、東京大学医学系大学院（医学博士）、米国スタンフォード大学、ハーバード大学での研究生活を経て、1997年より国際医療福祉大学教授、2004年より学科長、2016年より学部長、2020年より現職。2016年9月より2020年9月まで 安倍内閣構造改革徹底推進会合医療福祉部門副会長として医療介護のICT化や介護の科学化推進を提言してきた。

金子 惇 (かねこ まこと)



Western University, Master of Family Medicine 修了

経歴

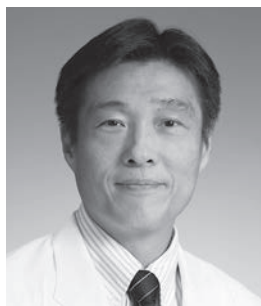
横浜市立大学大学院データサイエンス研究科ヘルスデータサイエンス専攻

2008年に浜松医科大学卒業、沖縄県立中部病院初期研修、沖縄県立中部病院プライマリ・ケアコース後期研修、沖縄県立北部病院附属伊平屋診療所、CFMD 東京リサーチフェロー、浜松医科大学 地域家庭医療学講座 特任助教を経て2020年4月より現職

東京慈恵会医科大学 臨床疫学研究部 「地域医療プライマリケア医学」博士課程修了

座長略歴

仲井 培雄 (なかい ますお)



経歴

◆略歴:

1985年 自治医科大学医学部卒
1987年 船倉島診療所長
1988年 白峰村診療所長
1989年 金沢大学附属病院第2外科入局、以降石川・富山両県の主要病院に勤務
1999年 医療法人社団 和楽仁 芳珠記念病院外科部長
2001年 医療法人社団 和楽仁 副理事長
2004年 医療法人社団 和楽仁 理事長
2012年 社会福祉法人 陽翠水 理事長、ほうじゅグループ代表
2014年 地域包括ケア病棟協会 初代会長

◆主な役職:

<全国>

- 一般社団法人 地域包括ケア病棟協会 会長
- 一般社団法人 日本慢性期医療協会 常任理事
- 一般社団法人 日本リハビリテーション病院・施設協会 理事
- 日本リハビリテーション医学教育推進機構 学術理事
- 日本在宅救急医学会 理事
- 一般社団法人 日本地域医療学会 副理事長
- 一般社団法人 日本医療・病院管理学会 理事
- 日本病院団体協議会 代表者会議 メンバー
- 日本病院団体協議会 診療報酬実務者会議 メンバー
- 地域医療を守る病院協議会 メンバー
- 公益社団法人 日本医療機能評価機構 評価事業運営委員会 委員
- 厚生労働省 医薬・生活衛生局「高齢者医薬品適正使用ガイドライン作成ワーキンググループ」委員 (2017.8 ~ 2019.5)
- 厚生労働省 老健局「介護保険総合データベースに格納するデータの第三者提供に関する有識者会議」委員 (2018.3 ~ 2020.6)
- 厚生労働省 保険局医療介護連携政策課「国保データベース (KDB) を用いた医療・介護連携に係る地域の特色に関する調査研究」検討会 委員
- 厚生労働省 令和4年度老人保健事業推進費等補助金 (老人保健増進等事業分)「リハビリテーション・機能訓練、口腔、栄養の一体的取組に関する調査研究事業」検討委員会副委員長
- 厚生労働省 老健局 令和4年度老人保健事業推進費等補助金 (老人保健増進等事業分)「介護老人保健施設の目的・特性を踏まえた施設の在り方に関する調査研究事業」班員

<県内>

- 石川県医療計画推進委員会地域医療構想策定部会 委員
- 石川県病院協会 理事

◆主な資格: 日本消化器内視鏡学会専門医、日本消化器病学会指導医・専門医。いしかわ技術経営 (MOT) スクール修了。

講演

講演

座長／小熊 豊 時間／11:05～12:15

講師／武久 洋三（日本慢性期医療協会名誉会長、日本地域医療学会理事、博愛記念病院理事長）

「地域多機能病院における総合診療医の役割」

2022年度診療報酬改定ではっきりしたことがある。それは新時代にふさわしい新しい機能別病院の姿である。今回の改定では、急性期病院の持つべき機能を明確に示した。本物の急性期病院は、新設された急性期充実体制加算を算定する病院と総合入院体制加算を算定する病院に絞り込まれ、医療資源の集約をしようとしているのである。そしてふり落とされた自称急性期病院は地域多機能病院となり、最終的に日本の病院は、「急性期病院」と「地域多機能病院」の2つに大別されていく。

この「地域多機能病院」のカギとなるのが「地域包括ケア病棟」である。今回の改定でこれまで一部の急性期病棟とみなされていた病棟の入院患者の入院期間延長のための受け皿的な便宜上の病床として使われていた機能を切り捨て、はっきりと地域多機能病院の中心病棟として位置づけた。また在宅機能の具備も要件化されたので、今後、より一層在宅療養患者や施設入所者の急変時受け入れを積極的に行い、地域のニーズにこたえられる病院を目指していかなければならない。

現在、入院患者の7割以上は65歳以上の高齢者である。多くの臓器に病変を抱え、各臓器の機能低下が集合した症状を示すことの多い高齢患者の治療は、身体全体を総合的に診療できる知識や技術のある総合診療医が担うべきである。

例えば誤嚥性肺炎を発症し入院してきた高齢患者に対し、抗菌薬治療だけでなく、看護師や管理栄養士、薬剤師、リハビリテーション療法士などと多職種連携し、サルコペニアに対する徹底した栄養管理やリハビリテーションによる筋力強化、嚥下機能評

価を行い、嚥下訓練と患者状態に合わせた食形態の食事の提供を行い、患者の早期回復に務め、さらに在宅復帰を見据えたフォローも必要である。

臓器別専門医は主病名の治療に専念しがちで、脱水や低栄養など軽く見がちであるが、高齢患者の場合、これらの症状を改善させなければ、肺炎自体の改善は困難である。また、急性期病院でベッド上絶対安静の状態が長期間続くことによって、特に高齢患者は寝たきり状態になってしまうのだ。

現在、厚労省の様々な会議の場で2040年を見据えた医療・介護提供体制のあり方について、増え続ける医療・介護費用をどうするかの話し合いが繰り返し行われているが、誰も増大する要介護者の発生をいかに食い止めるか、という根本的な問題解決に向けた議論をしない。要介護者は明らかに急性期病院で発生しているのに、この点を改善しなければいつまでもたっても問題は解決しない。

急性期病院での「栄養・水分摂取の軽視」「リハビリテーション軽視」「身体抑制」をなくせば要介護者は減る。そこで治療とともに患者が寝たきりにならないように栄養管理、リハビリテーションを行い、患者の全身状態を管理していくのが総合診療医の役割である。

現在の臓器別専門医制度を早急に見直し、2年間の初期臨床研修修了後、さらに2年間総合診療医のための研修を行い、その後から希望する臓器別専門医の研修とする制度にすべきである。そうすれば全ての医師は総合診療医としての知識と技術を併せ持つ臓器別専門医となれる。

現在の医師臨床研修制度の見直しが必要である。

武久 洋三 (たけひさ ようぞう)



経歴

勤務先および役職：医療法人平成博愛会 博愛記念病院 理事長
最終学歴：徳島大学大学院医学研究科（医学博士）

職歴・業績等：

昭和 41 年 3 月岐阜県立医科大学卒業。大阪大学医学部附属病院インターン修了。徳島大学大学院医学研究科卒、徳島大学第三内科を経て、現在、医療法人平成博愛会理事長、社会福祉法人平成記念会理事長、平成リハビリテーション専門学校校長等を務める。病院（一般・医療療養・回復期リハ・地域包括ケア）・介護老人保健施設・介護老人福祉施設・ケアハウスなどを経営。

専門分野：内科・リハビリテーション科・老年医学・臨床検査

団体役職等：

一般社団法人日本慢性期医療協会名誉会長、厚生労働省医療介護総合確保促進会議構成員、経済産業省次世代ヘルスケア産業協議会新事業創出ワーキンググループ委員、日本リハビリテーション医学会特任理事、独立行政法人国立長寿医療研究センター認知症医療介護推進会議委員、地域包括ケア病棟協会顧問、日本介護支援専門員協会相談役、ひょうご人生 100 年時代プロジェクト推進委員会委員、徳島県慢性期医療協会顧問、徳島県老人保健施設協議会副会長、NPO 法人徳島県介護支援専門員協会最高顧問

著書：

「よいケアマネジャーを選ぼう」「介護認定調査 正しい受け方・行い方」「介護保険・施設への緊急提言」「在宅療養のすすめ」「高齢者用基本治療マニュアル 64」「よい慢性期病院を選ぼう」「あなたのリハビリは間違っていないか」（いずれも株式会社メディス）「こうすれば日本の医療費を半減できる」（中央公論新社）どうするどうなる介護医療院（日本医学出版）、令和時代の医療・介護を考える（中央公論事業出版）

資格等：

日本内科学会認定内科医、日本リハビリテーション医学会認定臨床医、臨床研修指導医、THP 産業医、介護支援専門員、介護支援専門員指導員、ケアマネジメントリーダー、日本臨床検査医学会臨床検査管理医、日本糖尿病協会療養指導医、認知症サポート医 2022 年 7 月現在

小熊 豊 (おぐま ゆたか)



経歴

昭和 25 年 1 月 11 日生まれ（北海道早来町）

北海道大学卒業（昭和 50 年）

北海道大学内科学第一講座助手

富山医科薬科大学臨床検査医学講座助教授

帯広厚生病院第 4 内科部長

砂川市立病院 院長（平成 8 年）

砂川市立病院 事業管理者（平成 26 年）

砂川市立病院 名誉院長（平成 30 年）

全国自治体病院協議会 理事（平成 14 年）、常務理事（平成 17 年）、副会長（平成 22 年～）、会長（平成 30 年～）

ランチョンセミナー

講演

講演

時間／ 13 : 00 ～ 14 : 10

講師／白石 吉彦（一般社団法人日本地域医療学会理事）

「明日から使える外来超音波診療 膝・肩編」

厚生労働省が3年に1回、約30万世帯70万人の日本人を対象に調べている国民生活基礎調査というものがあります。その中に、あなたは健康に関して何に困っていますか、という有訴率というものがあります。1位腰痛、2位肩こり、3位関節が痛むとなっています。皆さんの働いているセッティングではどうでしょうか。おそらくどこの地域でも同じ状況では

ないかと思います。

今回のセッションでは近年、解像度が良くなりコンパクトになったポータブルエコーを用いて膝、肩関節の診かたをお示しいたします。描出の方法や穿刺のコツなどについて実演を行い、明日から使える技をお伝えいたします。

白石 吉彦 (しらいし よしひこ)



2014 年第 2 回日本医師会赤ひげ大賞受賞

2021 年日本プライマリ・ケア連合学会 第 14 回田坂賞受賞

拙著：離島発 いますぐ使える！外来診療小ワザ離れワザ（中山書店：2014）

THE 整形内科（南山堂 2016.5 書籍 編集幹事）

離島発にとって隠岐の外来超音波診療（中山書店：2017）

離島発にとって隠岐のエコーで変わる外来診療（中山書店：2019）

経歴

1992 年 自治医科大学卒、徳島で研修、山間地のへき地医療を経験。

1998 年に鳥根県の隠岐諸島にある島前診療所（現隠岐島前病院）に赴任。

2001 年には院長になり、周囲のサテライトの診療所を含めて総合医の複数制、本土の医療機関との連携をとりながら、人口約 6,000 人の隠岐島前地区の医療を支えている。

2021.4.1 より隠岐島前病院参与となり、鳥根大学医学部附属病院総合診療医センター長に就任。

所属：日本プライマリ・ケア連合学会

パネルディスカッション

パネルディスカッション

時間／ 14 : 20 ～ 16 : 30

テーマ	地域医療の魅力を発見し伝えていくために、 わたしたちができること
司会者	川合 菜加 (鹿児島大学医学部 3 回生)
	橋本麻里奈 (神戸大学医学部 3 回生)
	江角 悠太 (志摩市民病院院長 14 年目)
発表者	林 俊太 (志摩市民病院医長 7 年目)
	山本 恭資 (亀田総合病院医長 9 年目)
	日下 伸明 (志摩市民病院副院長 9 年目)
	酒井 郁弥 (琉球大学医学部 3 回生)
アドバイザー	松本 昌美 (南奈良総合医療センター院長)
	竹田 寛 (三重県病院協会理事長)
	四方 哲 (京都府山城北保健所長、京都府立医科大学大学院 医学研究科総合医療・地域医療学教授就任予定)
	大浦 誠 (南砺市民病院内科副部長)

発表要旨

私は三重県で生まれ育ちましたが、大学は沖縄県の琉球大学に行き、卒後は京都府の病院で6年間働きました。そして、12年ぶり、医師7年目で三重県に戻ってきました。卒後研修を終えて内科専門医も取得し、子供も生まれたため地元の三重県に戻りたいという気持ちが出てきたわけですが、地元でも12年間も離れていると三重県の医療、病院の事情などは全くわからず、どこに帰って来ればいいのか分かりませんでした。そもそも医局にも所属していない若手内科医師の需要があるのか。実際に働いてみると、必要とされていると感じる場面も多く、また自分のような若手にとっても田舎の療養型病院から学ぶこと、ここだからこそ学べるのが数多くあると実感しています。また現在は、ここで活躍することにより、私と同じように地元に戻りたくても帰れない、帰り方がわからないといった境遇にいる医師にとってのロールモデルになればと考えています。

また、がっかりされてしまうかもしれませんが、私は今まで地域医療について、特に強い興味を持っていたわけではありません。たまたま知り合いを通じて紹介してもらった先が現在勤務している志摩市民病院で、結果として田舎、僻地と呼ばれる場所で働くことになっています。なので、地域貢献への熱い気持ちというのありませんでした。ただし、実際に働いてみるとやはりその魅力を感じることがあります。特に患者の生活背景まで深く関われるところが面白く、病院として地域の祭りに参加したり、逆に病院主催で祭りを企画することで地域住民との交流の場としています。また、そこにはいつも実習の学生も参加しており、彼らにはうまく地域医療の魅力が伝わっているように感じられます。学生への教育、発信を通じて、衰退していく地域医療の明るい展望が見つかるのではないかと考えています。

発表要旨

私は三重大学を卒業し、沖縄県や千葉県の病院で研修してきたが、今後は三重県の地域医療に従事しようと考えている。大学生の時は、看護助手業務で医療に触れ、「たらい回しをなくす」「何でも屋になる」という思いを胸に沖縄での研修生活を送った。沖縄では、島医者養成プログラムという魅力的なものに出会い、卒後5年目に赴任することになった。南大東島は、沖縄本島から400 km、人口1,300人の絶海の孤島であり、島内唯一の医師として2年間従事した。診療所は医師1人、看護師1人、事務2人で運営しており、検査器具も限られているが、家庭医として、24時間365日オンコール体制で全科の対応をすることになる。研修病院での「自分のレベルがその島の医療レベル」という言葉を胸に刻み、学んできた全てを発揮した。自衛隊と協力した患者搬送、災害対応、多職種連携など多様な役割を担うと同時に、1人の島民として生活した。地域医療の中でも離島医療はさらに特殊な環境であるが、通常の医療に対する問題解決のみならず島で起こる様々な問題を多職種で連携しながら解決した。責任のある立場として、島民を支え、島民に支えられながら、より良い島の生活をできるように地域作りに励ん

だ。そのようなプロセスの中で、島民から信頼され、感謝されることがやりがいであった。また離島というコンテキストの中で、濃密な医師患者関係、家族との関係、人間関係を体感することも貴重な経験となった。

三重大学を卒業するときから「三重県を出て研修してこい。その代わりに学んだものを持って帰ってこい」という言葉が心に強く残っており、約10年間ずっと自分にも周りにも言い続けてきた。それだけ長く思い続けることができたのは、自分を育ててくれた場所であるだけでなく、恩師や先輩と定期的に連絡を取っていることも大きかった。これまでやってきた医療の中で、「たらい回しをなくす」「何でも屋」「離島医療」というキーワードから必然と地域医療の一端を担うことを決意している。私にとっての地域医療の魅力とは責任感や人間関係であり、その魅力を感じるにはやはり実際に経験することが重要である。学生や研修医にどこで魅力的な地域医療が行われているかを知ってもらい、地域医療に対する熱いマインドを持つ学生や医療従事者に対しては継続的に支援していく必要があると考える。

発表者／日下 伸明 (志摩市民病院副院長 9 年目)

発表要旨

「街づくりの一環としての医療を行い、地方から日本をよくしていきたい」

この言葉を胸に、千葉県から三重県志摩市に移住した。

元々は千葉県の人口約3万人の市に立地する3次医療機関病院での救急診療や研修医教育、部門運営に関わりながら勤務する上で、私が提供すべき医療は何なのかという問いに辿り着き、ふと街の声を聞く機会があった。むしろ医療だけではなく産業の衰退、人口減少、高齢化などの問題が街を元気にしていない原因になっていると気づいた。これはへき地だけの問題ではなく、今後日本全体が直面する問題である。問題解決には、地域、県、日本がどのような方向に進むのかという風を読みながら社会課題を解決していくような人材が必要であるが、特に人口減少地域では人材不足もありそのような存在は少ない。解決策として、あらゆる職種が個々の専門性に留まらず、医療でいう generalist のように関連しながら地域を考えていく必要があり、例外なく医師も

医療に従事しながら地域の方向性やニーズを把握し、これからの地域課題の解決に関わりながら、求められる医療構想を実現できる医師の養成が不可欠であると感じた。ただし、そもそもへき地での医師確保は困難を極めており、特に気力・体力共に十分な若手医師の確保は全国的な医療施設の課題でもある。私の知りうる限りのやる気のある若手医師の中には「やりがい・立場・教育」のキーワードを重要としている医師も多く、その要件を叶えるためにへき地は魅力的な選択肢であるといえる。若手医師のキャリアパスの一例として私自身がなぜ縁もゆかりもない三重県に、どのような思いを持ってやってきたのかを紹介したい。同時に、現在私が副院長として取り組んでいる「病院長養成コース」の策定を通して、へき地で活躍する若手医師の新しいキャリアパスを描き、院内マネジメントに留まらない街づくりの一環としてのへき地医療の充実のための一案を提言したい。

発表者／酒井 郁弥 (琉球大学医学部 3 回生)

(発表要旨はございません)

林 俊太 (はやし しゅんた)



経歴

2016 琉球大学卒業
2016-2017 宇治徳洲会病院 初期研修医
2018-2020 宇治徳洲会病院 救急総合診療科 専攻医
2021 宇治徳洲会病院 救急総合診療科
2022- 志摩市民病院 総合診療科

山本 恭資 (やまもと きょうすけ)



経歴

1988 年生まれ、2014 年三重大学卒業。沖縄県立中部病院で初期研修を行い、島医者養成プログラムを経て、南大東診療所で離島診療所医師として従事。2020 年 4 月より亀田総合病院のリウマチ膠原病アレルギー内科に所属する。

日下 伸明 (くさか のぶあき)



2022 年 志摩市民病院 副院長

経歴

2014 年 埼玉医科大学卒業
2014 年 亀田総合病院 地域ジェネラリストプログラム 初期
臨床研修医
2016 年 安房地域医療センター 救急科
2017 年 亀田総合病院 救命救急科
2019 年 亀田総合病院 救命救急科 兼 卒後研修センター
センター長補佐
2021 年 亀田総合病院 救命救急科 兼 在宅診療科 卒後研
修センター センター長補佐

酒井 郁弥 (さかい いくや)



経歴

平成 31 年 東京都立国立高校卒業
令和 2 年 琉球大学入学

松本 昌美 (まつもと まさみ)



2006年4月 奈良県立五條病院 副院長 兼 附属看護専門学校長
 2008年7月 奈良県立五條病院 院長
 2012年3月 南和広域医療組合 副管理者(医療担当)兼務
 2016年4月 南和広域医療企業団 副企業長 兼 南奈良総合医療センター 院長

現在に至る

[役職など]

公益社団法人全国自治体病院協議会副会長、一般社団法人日本病院会常任理事・奈良県支部長、一般社団法人奈良県病院協会副会長、NPO法人PDN(Patient Doctors Network)理事

[学位]

医学博士(奈良県立医科大学、1995年)

[専門領域]

消化器内科(消化器病学、肝臓病学、消化器内視鏡学、臨床栄養学)

[学会活動・資格など]

全国自治体病院学会(評議員・第59回学会長)、日本医療マネジメント学会(評議員)、日本内科学会(認定医・近畿支部評議員)、日本消化器病学会(指導医・評議員)、日本消化器内視鏡学会(指導医・評議員)、日本肝臓学会(指導医)、日本静脈経腸栄養学会(評議員)、PEG・在宅医療学会(監事)、PEG・在宅医療学会認定胃瘻教育者・専門胃瘻造設者・専門胃瘻管理者、日本医師会認定産業医

[賞罰]

平成28年度全国自治体病院協議会へき地医療貢献者表彰

経歴

[学歴]

1982年3月 奈良県立医科大学医学部卒業

[職歴]

1982年5月 奈良県立医科大学附属病院 臨床研修医(第3内科)
 1982年9月 国保連合会大三輪病院内科 医員
 1984年7月 奈良県立奈良病院内科 医員
 1985年4月 奈良県立奈良病院救命救急センター 医員
 1985年7月 新千里病院内科 医員
 1986年7月 奈良県立医科大学附属病院 医員(第3内科)
 1993年10月 奈良県立医科大学 助手(第3内科)
 1997年9月 奈良県立五條病院中央臨床検査部 部長
 1999年10月 奈良県立五條病院内科 部長

竹田 寛 (たけだ かん)



2013年 官民3病院の統合により誕生した地方独立行政法人桑名市総合医療センター理事長・統括院長に就任

2018年 三重県病院協会理事長に就任

専門医・認定医

放射線科専門医、核医学専門医、PET核医学認定医

経歴

1975年 三重県立大学医学部卒業
 慶応義塾大学医学部放射線診断部研修医
 1976年 三重大学医学部放射線科助手
 1983年～1985年
 アメリカ合衆国 Johns Hopkins 大学医学部放射線核医学科留学
 1997年 三重大学医学部放射線科教授就任
 2009年 三重大学医学部附属病院院長を併任
 2012年 放射線科教授退職、専任の附属病院院長に就任

四方 哲（しかた さとる）



2021 年 京都府山城広域振興局健康福祉部兼山城北保健所（部長兼所長）

2023 年 京都府立医科大学大学院医学研究科総合医療・地域医療学（教授）

経歴

1994 年 自治医科大学卒業、京都府立医科大学付属病院（第二外科研修医）
1996 年 久美浜町国保久美浜病院（外科医員）
1999 年 京北町国保京北病院（外科医長）
2003 年 京都大学医学部附属病院（総合診療科医員）、京都大学大学院医学研究科（臨床疫学研究生）
2005 年 医療法人社団蘇生会総合病院（外科医長）
2012 年 三重県立一志病院（総合診療科、病院長）

大浦 誠（おおうら まこと）



主要業績

連載：週刊医学界新聞「ケースで学ぶマルチモビディティ」医学書院

編著：終末期の肺炎 南山堂

編著：治療「摂食・嚥下障害の意思決定支援」南山堂

共著：誤嚥性肺炎 ただいま回診中！ 中外医学社

経歴

2009 年 福井大学医学部 卒
2014 年 南砺市民病院とやま NANTO 家庭医養成 PG 修了
2015 年 南砺市民病院内科医長・総合診療科医長
2021 年 同病院内科副部長・総合診療科副部長、南砺市民病院総合診療医養成プログラム統括責任者
専門分野：家庭医療、多疾患併存、摂食嚥下障害、臨床倫理、医学教育

川合 菜加 (かわい なか)



経歴

2007 年名古屋大学農学部卒業。楽天株式会社等の勤務経験を経て、2021 年鹿児島大学医学部医学科 2 年次編入。エムスリー株式会社勤務。

橋本麻里奈 (はしもと まりな)



経歴

神戸大学医学部医学科 3 年

江角 悠太 (えすみ ゆうた)



経歴

東京出身

2000 年、東京都立西高等学校卒業

2009 年、三重大学医学部卒業

2009 年、沖縄中部徳洲会病院 初期研修医

2011 年、三重大学家庭医療総合診療科

亀山医療センター 名張市立病院 県立一志病院

2014 年、ピースボート船医

2014 年 12 月 志摩市民病院内科

2016 年、同病院長 総合診療科

2018 年、全国自治体病院協議会三重支部長

2019 年、地域包括ケア病棟協会理事

2020 年、地方創生医師団 (TAO 医師団) 団長

2021 年、全国自治体病院協議会中小病院委員

2022 年、日本地域医療学会理事、三重県病院協会理事

全国自治体病院協議会地域包括医療・ケア認定審査委員

教育関連、所属資格)

NPO 法人 Touch the future

一社未来の大人応援プロジェクト

三重大学医学部

ユマニテク看護助産専門学校

名古屋医専

鈴鹿医療科学大学

皇學館大学

東京医科歯科大学医学部

日本専門医機構

日本プライマリケア連合学会

理事

理事

臨床講師

非常勤講師

非常勤講師

非常勤講師

非常勤講師

非常勤講師

総合診療特任指導医

家庭医療専門医 指導医

閉会式 16 : 30 ~

閉会のことば

第 1 回日本地域医療学会

副学会長 矢 野 諭

第1回

日本地域医療学会
学術集会御協賛名簿

第1回日本地域医療学会 学術集会御協賛名簿 (五十音順)

協賛

いわしや佐東器械店様 (横手市)

株式会社インターメディカル様 (東京)

株式会社大塚商店様 (秋田市)

有限会社共栄メディカル様 (大仙市)

クロスウィルメディカル株式会社 横手営業所様 (横手市)

株式会社 自治体病院共済会様 (東京)

太平熔材株式会社様 (秋田市)

株式会社中央科学様 (秋田市)

中和印刷株式会社様 (東京)

日本印刷株式会社様 (東京)

パラマウントベッド株式会社 名古屋支店様

富士通ジャパン株式会社(秋田) 大森様

株式会社ミルキーココインターナショナル様 (東京)

株式会社ヤマコー様 (秋田市)

全国国民健康保険診療施設協議会 (国診協) 様

**第1回学術集会事務局
(一般社団法人日本地域医療学会内)**

〒105-0012 東京都港区芝大門 2-6-6 VORT 芝大門 4F

TEL : 03-6402-4010 / FAX : 03-6402-4011

E-mail : office@jach.or.jp



一般社団法人日本地域医療学会
Japanese Association of Community Healthcare

<https://www.jach.or.jp>